分教場の跡を訪ねて その（六）

大間小学校　宇藤木分教場

高司良恵
（会員　佐伯市宇山区）

宇藤木分教場沿革

・宇藤木分教場創立　明治四十年六月三日
運動場六十坪　校舎七十八坪　尋常科四年生まで
・昭和十二年四月一日　尋常科四学年を改め、尋常科三年生まで
・昭和四十一年三月二十九日　廃校式典挙行
・昭和四十一年十一月二日　宇藤木分教場屋根修理
・現在、宇藤木世帯数四十六戸、百四十六人、小学生七名、スクールバスにて明治小学校へ通学している。スクールバスは町営。

宇藤木分校児童の変遷（1～4年生）

≪明治小≫

大正元年(明治45年)……32人	昭和14年……25人
大正２年……30人	昭和15年……26人
大正３年……28人	昭和16年……25人
大正４年……27人	昭和17年……23人
大正５年……28人	昭和18年……21人
大正６年……23人	昭和19年……20人
大正７年……18人	昭和20年……26人
大正８年……20人	昭和21年……23人
大正９年……19人	昭和22年……？人
大正10年……19人	昭和23年……？人
大正11年……24人	昭和24年……15人
大正12年……23人	昭和25年……15人
大正13年……？人	昭和26年……？人
大正14年……27人	昭和27年……？人
大正15年(昭和元年)……？人	昭和28年……？人
昭和２年……25人	昭和29年……？人
昭和３年……28人	昭和30年……25人
昭和４年……28人	昭和31年……26人
昭和５年……？人	昭和32年……？人
昭和６年……28人	昭和33年……？人
昭和７年……26人	昭和34年……？人
昭和８年……28人	昭和35年……？人
昭和９年……30人	昭和36年……？人
昭和10年……25人	昭和37年……？人
昭和11年……28人	昭和38年……？人
昭和12年……28人	昭和39年……？人
昭和13年……27人	昭和40年……５人
	昭和41年……２人

弥生町教育委員会提供

宇藤木の山地集落は、番匠川の支流である井崎川の上流部にある。標高およそ一〇〇メートル、延長六キロメートル上流の渓谷である。集落の起源については定かではないが、すでに中世には村落を形成していたのではないか。明治八年（一八七五）尺間村に合併され、明治二十二年には明治村に属している。

弥生町を国道十号線に沿って大分方面に向かう。滝美苑を過ぎ次のドライブイン山水苑を過ぎると、右手に入る新しい橋がある。道幅も広くよく整備されている。車で二、三分で宇藤木地区に着いた。肌寒い日であったが、手作りのバス停に三、四人の人達が集まっていた。挨拶を交わすととても気安く心地よい印象を受けた。

宇藤木分校は、地区の入り口の小高い所にあった。車から降りて急な坂道を上がると、滑らないようにコンクリートで段をつけ、雨が降ってもころばない様に配慮されていた。

高く積まれた石垣には、春草が萌え始め苔生した一つ一つの石に、分校の歴史が刻まれているように思えた。整然としたすばらしい石垣、校舎を囲むように菱形にくりぬいたモダンな塀は、危険防止の塀でもある。

校舎への上り道、校舎を囲む塀等すべてが、子ども達への思いやりの深さが伝わってくる。

分校玄関には日本赤十字社、河野和佑さんの門札が掛けてあった。「ああ、分校も売却され個人所有になっている

宇藤木分教場玄関

なあー。」と直感できた。校舎は原型をとどめているものの、荒れ果てて可成のいたみ様であった。中を覗くと教室の面影はなく、倉庫代わりに荷物が入れてあった。以前は人が住んでいたとのことであったが、今は無人となっている。

分教場と上り道

裏にまわってみたが、枯れた草木が折り重なり相当ひどい荒れ様で、近づくことはできなかったが、手洗い場、便所と倉庫らしき跡は伺えた。裏山に足をふみ入れることはできなかったが、よく見ると枯れた草木も芽吹き始めていた。

ただ、表玄関の作りがなにかしら分校の面影をとどめ、裸電球の門燈がぽつんと人待ち顔のように残っていた。

再び中を覗いてみたが、うす暗く寄りつき難く、未練心を抱きながらもやがてこの分校も姿を消す運命になるのではないかと、淋しいような反面致し方のないことと、あきらめにも似た気持でいっぱいだった。

当時、運動場は分校の下にあったが、今は公園化されゲートボール場として、区民の広場に活用されている。

分校をあとに地区に入る。井崎川の渓流の音を聞きながら歩く。トラックの往来がはげしく、向こう岸に新しい林道が建設されていた。間もなく河野様方に着く。

石塀で囲まれた家屋は、どっしりと昔ながらの偉容をとどめている。広い坪（庭）や倉、早速家に招じられて中を拝見する。

先代の河野国蔵さんは人格学識共に優れ、宇藤木地区から郡会に出て活躍された方で、数々の業績が残されている。昭和四年七十二歳で歿している。

倉の整理をしていたら、国蔵さんが使用したという古い教科書があったとのことで見せていただいた。可成ぼろぼろに朽ちてはいたが、文字やさし絵などは、まだまだ判読できる状態であった。

一部を紹介すると、

昔の教科書

昔の教科書

・『新童子往来万代宝蔵』という本の目録の中に天神経三丁・義経腰越状・風月往来
文化四年丁卯初春・江戸書林・敦賀屋九兵衛
・大阪書林・海部屋勘兵衛・秋田屋太右衛門

内容は、さし絵の入った辞書的なもの、修身や歴史と文学的なもののようであったが、貴重なものを見せていただくことができた。そのあと、分校出身である当家の河野照子さんに、当時の様子を話していただいた。

分校に務められた先生方は男ばかりで、宮川先生、亀井先生、市野瀬先生だったとよく覚えていた。中でも市野瀬先生は当弥生町の御出身で、自宅から分校まで通勤され、閉校になるまで献身的に分校教育に情熱を注がれたと言い、先生の面影は忘れることができないと話して下さった。当時の分校生は二十五、六人で、教師一人が受持ち四年生までで、五年生になると本校（大間小学校）まで約七・四キロメートルの道のりを、歩く子、自転車に乗る子などあって、途中で道草をして遊んだり、喧嘩をしながら通学した事が、とてもなつかしい思い出であり、幾星霜の今日でも、幼き友達が亡くなったり他地区に行かれたりすると、淋しい気持でいっぱいですと話して下さった。

年に一度あった分校生と本校生との交流は、秋の運動会であったという。

また、分校には青年の夜学もあり、向学心に燃えた地区でもあった。卒業生の殆どは炭焼きか椎茸栽培と、大工か左官になる人が多かったそうである。

また、こんなエピソードも話して下さった。当時、大間小学校の校長先生は、元史談会長の高木嘉吉さんであった。

ある日校長先生は、宇藤木の子ども達を校長室に呼び寄せ、「宇藤木の君達はなぜ毎日毎日遅刻するのか…。その訳を聞きたい。」と迫ったが、子ども達はみんな下を向いて誰ひとりとして答えなかった。しばらくして校長先生は、「よし!!理由を言わないのなら今晩は宇藤木に泊まって、明日の朝君達と一緒に歩いて本校まで行く。」、と言って校長先生は早速そのことを実行した。

翌朝、校長先生と子ども達はいっしょに歩いた。校長先生を先頭に子ども達は後を黙々と歩いていたが、大人と子どもの歩幅の違いもあり、子ども達は疲れ果ててしまった。結局、校長先生はひとりでさっさと学校まで先に着いて、子ども達の着くのを今か今かと待っていた。やっとの思いで学校に着くと、「君達は歩き方がおそい

からいつも遅刻するのだ。」と言われたのが印象強く残っていると話されたが、私はこの話を聞きながら、高木先生のお人柄が偲ばれてきた。

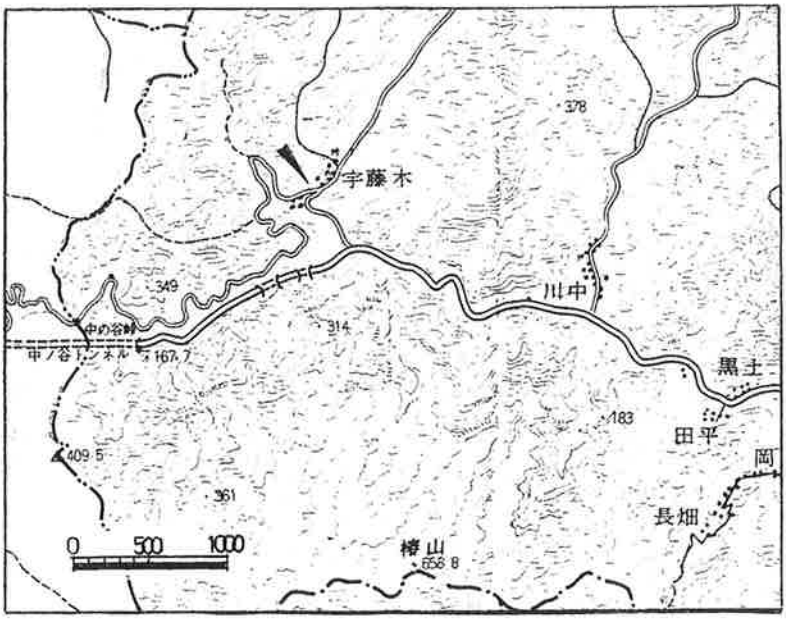
縁あって高木先生とは昭和中学校切畑校舎で、校長として御指導をいただき、また、切畑小学校では初代会長の羽柴弘先生であった。私にとっては、すばらしい出会いの時代であった。

高木先生のぽつりぽつりとではあるが、温情のあるお声と、やさしい眼差しの真面目なお姿が胸中を去来し、現在教育の在り方について、なにかしら暗示を投げかけられる思いがする。

児童数の激減に伴う統廃合の問題が、よく新聞紙上に取り沙汰されているが、身近な佐伯市南郡に於いても、統合・休校を止むなきに到っている学校も数ある。

新入生なし卒業生ひとり、中学校では三人しかいないとか、小学校では複式・複々式と…こんな現状もみられる。

分校跡を訪ねる度に、淋しい反面ぬくもりがまだまだ伝わってくる。校舎・運動場・分校で学んだ人達の話の中に、真の教育の姿が脈々として生きづいているのを強く感じる。



・参考資料　弥生町誌
・資料提供
・弥生町教育委員会社会教育課
・弥生町役場住民課
・助言者
・宇藤木在住　河野照子氏

（ありがとうございました。）

表紙解説

この神楽は、蒲江浦の王子神社で奉納されている神楽十二番のうち、九番目に舞われるものである。毎年一月十日と九月十日のいわゆる十日戎（えびす）と、春の例大祭の四月三・四日に奉納されている。神楽奉仕員は舞人二人と大太鼓一人、小太鼓・横笛・チャンガラは一人内至二人ずつ、時によって人数が増えることもある。

この恵美須・大黒舞の起源については、王子神社の疋田社家にある「当浦日記」によると、宝暦四戌（いぬ）年（一七五四）四月に「御鳥居一宇奉納」と記されているが、当時の恵美須神社は西之崎の保育所跡辺りにあった。しかし、海が近く台風の被害を度々受けたので、向浜の竹田屋旅館跡付近に移した。それは安永二己年（一七七三）十月のことであり、盛大な海上渡御であったという。この時はじめてこの神楽が奉納されたものか、或いは以前から舞われていたものかつまびらかでない。

恵美須（事代主命）と大黒（大国主命）は、七福神のなかでも最も庶民に親しまれており、恵美須は漁の神大黒は商売繁昌、五穀豊饒の神として、二神一対で広く尊崇されている。

解説　西　元　由　雄